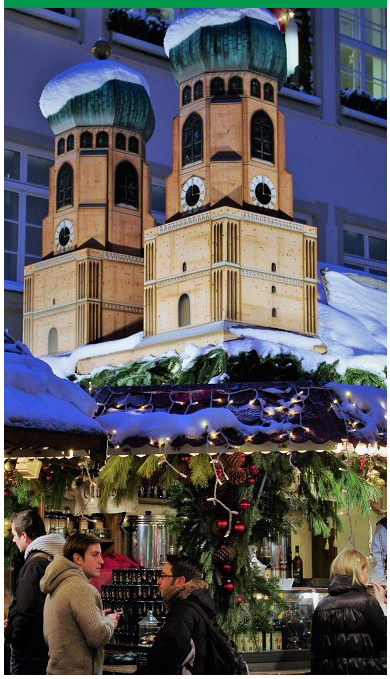
クリストキントとともに ドイツのクリスマス・マーケットがやってきた！

山田恒一郎／文・写真

ミュンヘン



フランクフルト

冬の足音が聞こえ始めると、欧州各国の街々はクリスマスの装いを顕わにし、人出が増して一気に活気づく。11月下旬からクリスマス・イブのころまで、イルミネーションが輝き、中央広場やおもな辻々にクリスマス・マーケットが立って賑わう。

中でもドイツのクリスマス・マーケットは、その起源が最も古いうえに、「一つの街に一つのマーケットがある」といわれるくらい、全国で2500を超えるクリスマス市が立ち、「クリスマス・マーケットの国」という名を欲しいままにしている。

ドイツの街々では、コロナ禍の影響で、昨年、一昨年と二度にわたり、クリスマス市の中止や縮小を余儀なくされたが、2022年には3年ぶりに全国規模でクリスマス・マーケットが一斉開催される。公共の広場に巨大なクリスマスツリーが立ち、クリストキント（幼い子供の天使）がいたるところに掲げられ、伝統のヒュッテ(屋台の出店)が軒を並べる。モミの木のツリーやクリスマスの飾りを売る店、サンタクロースやクリストキントのお人形、くるみ割り人形の兵隊さんなどを売る店、伝統のお菓子「レープクーヘン」（スパイスやジンジャーの効いたクリスマス用のクッキー）を売る店などに加え、グリューワイン（ホットワイン）にロースト・ソーセージを売る店が公共広場を埋め尽くす。昼間から売り子の掛け声が広場に飛び交い、ジングルベルが鳴り響いて、ドイツの街々はクリスマスの祝祭ムードに湧き上がる。

サンタクロース

クリストキント

チェコとの国境に近い都市ドレスデンにクリスマス市が立ったのは、1434 年で世界最古（一説に、1393 年起源のフランクフルトが最古）といわれる。キリスト降誕の日に備えて、各々の家庭でモミの木のツリーに様々なオーナメントを付けて飾る習慣が始まったのも、同じく 15 世紀であろう。

クリスマス・オーナメント

レープクーヘンを売る屋台

クリスマスの主役、サンタクロースの起源も古い。17 世紀に米国に現れて、瞬く間に世界中でアイドルになった。サンタクロースが現れる以前は、ロシアの守護聖人ニコラが、子供たちのアイドルだった。聖ニコラには、こんな麗しい伝説がある。破産したため身売りされなければならなくなった三人娘の家に、司教のニコラは夜中にこっそり金の入った袋を差し入れた。翌朝、父親は長女を身売りに出すことを思いとどまった。二日目の深夜にも三日目の深夜にも、やはり金の入った袋が届けられたので、三人の娘たちは身売りに出されることなく、幸せな結婚ができたという。欧州では、聖ニコラの命日に当たる 12 月 5 日は、よい子にご褒美が与えられる祝祭日。現在も欧州では、12 月 5 日に伝統行事を盛大に催す地域が残るが、多くの地域では、米国生まれのサンタクロースが聖ニコラに替わってクリスマスの主役になった。12 月 25 日の未明に、２頭立てのトナカイに乗ったサンタクロースが子供のいる家庭を回りプレゼントを贈り届ける。敬虔な宗教行事と子供たちの夢の世界が重なった欧州のクリスマスは、家族全員が厳寒期に向けて強い連帯を込めて楽しく過ごすまたとない機会である。

以下に、世界最大といわれるドイツのシュツットガルトのクリスマス・マーケット、世界で最も有名といわれるニュルンベルクのクリスマス・マーケット、そして南ドイツ最大の都市でありビールと BMW 車の街ミュンヘンのクリスマス・マーケットを紹介しよう。

くるみ割り人形

色柄ガラス球

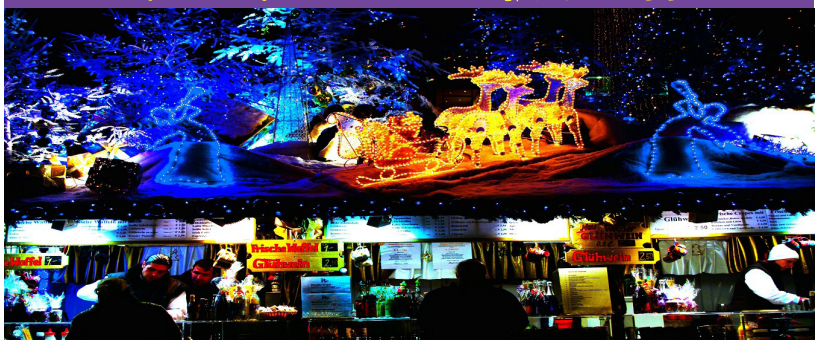
シュツットガルト

シュツットガルト

サンタクロースの装飾屋台

キリスト降誕の場面

イルミネーション屋根の屋台



1692 年が起源とされるシュツットガルトのクリスマス・マーケットは、市の中心部のシュロス広場、シラー広場、マルクト広場、カールス広場の 4 ケ所で同時開催される。主会場となる市庁舎前のマルクト広場には、ひときわ大きなヒュッテ（クリスマス用品を売る屋台）が立ち並び、大勢の買い物客で賑わうほか、どの会場も各々趣向を凝らせたヒュッテを連ね、巨大なクリスマスツリーやイルミネーション塔など、クリスマスのシンボルを建てて競い合う。さらに、4 つの会場を繋ぐ通りにもミニ・マーケットが多数開店して人通りが絶えず、シュツットガルトの中心部は、アドベント（クリスマスイヴまでの 4 週間）の期間中、クリスマス・ムード一色になる。

シュツットガルトのクリスマス市は、他都市のクリスマス市と比べ、ヒュッテの規模が大きいうえに、1 ケ所当たりの出店数が多く、シュツットガルト全体で 300 店にものぼることから、長らく「世界最大のクリスマス・マーケット」と呼ばれてきた。ヒュッテの大きさのみならず、ヒュッテの屋根飾りが大きく豪華であることも特徴で、キリスト降誕の場面を示す大きな人形たちが賑々しく載っているかと思えば、等身大のサンタクロースが贈り物を持てるだけ持って屋根に居座っている。

夕闇に包まれるころ、ヒュッテの屋根装飾にライトが照らされ、無数の豆電球が点滅し始めると、マーケット広場はおとぎの国のような装いに一変し、買い物客を魅了する。2019 年には、会期中の内外の入込客数が 350 万人超にのぼった。

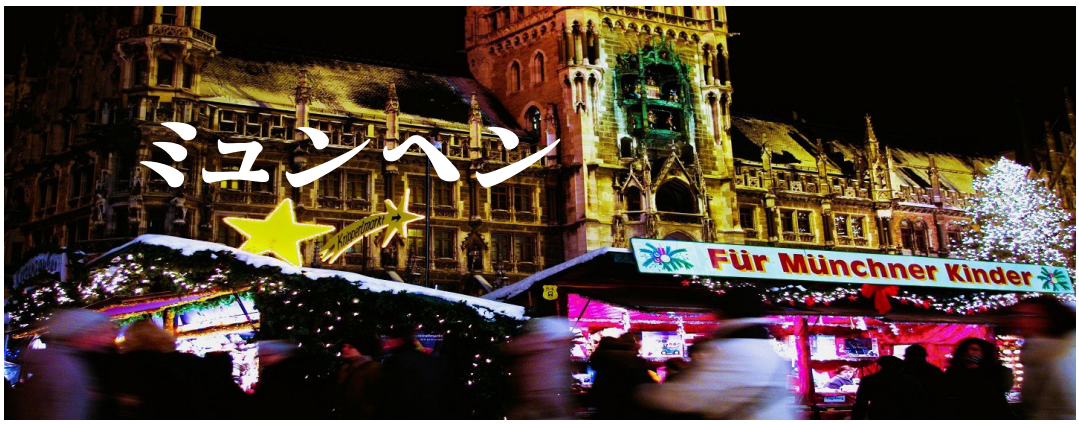
笑顔のクリストキント

ニュルンベルクのクリスマス市は、「世界一有名」なクリスマス・マーケットとして知られる。そのメイン会場は、14 世紀建造のフラウエン教会前のハウプトマルクト。赤と白の縞柄のテント屋根の屋台が 180 店以上も建ち並ぶハウプトマルクトは、別名、「クリストキンドレスマルクト」と呼ばれる。それは、２年に１度のコンテストで選出されるクリストキント（幼い子供の天使）の開会宣言によって、ニュルンベルクのクリスマス市が始まるからだ。金髪の頭に王冠を載せたクリストキントは、会期中、クリスマス市に集まる子供たちに祝福のメッセージを与え続ける。お人形でない本物のクリストキントの登場が、ニュルンベルクのクリスマス・マーケットを世界一有名にしたといえそうだ。もちろん、ハウプトマルクトの露店で売られるクリスマス用の手工芸グッズが、マーケットに集まる人々の目を奪うことも確かだ。

ドイツ製のクリスマスグッズとして名高いのは、煙出し人形、木製のくるみ割り人形、クリスマス・ピラミッド、クリッペ（キリスト生誕の場面を模した手工芸品）、製作と絵付けがすべて手作りのガラス玉などで、ニュルンベルクの東方、チェコ国境のエルツ山地の村々で作られる。中でも、くるみ割り人形の発祥の地として知られるザイフェン村で製作される玩具の品々は、精巧かつデザイン性に優れていることで内外に知れわたる。可愛らしさ溢れるエルツ山地のクリスマスグッズに加え、ニュルンベルク産と産地指定された「ニュルンベルガー・ローストブラートヴルスト」（スパイスのきいた小振りのソーセージ）や同じくニュルンベルク名物のクッキー菓子「レープクーヘン」は、ドイツで一番美味と名高い。冷たい地ビールやグリューワインとともにニュルンベルガー・ヴルストをほおばりグルメする楽しみを求めて、ニュルンベルクに来訪する内外の観光者は年々増え続ける。会期中の延べ入込み客は、すでに 200 万人を超えた。

ハウプト広場全景

フラウエン教会前の市の賑わい

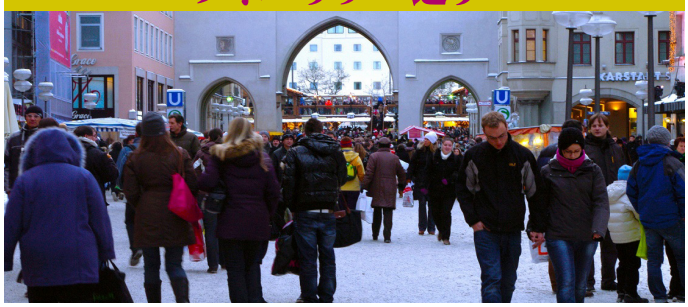


一説に起源は 1310 年に遡るとされるミュンヘンのクリスマス・マーケットは、街中 120 ケ所もの場所で開催される。おもなマーケット会場としては、新市庁舎前のマリエン広場、中央駅からマリエン広場に通じる歩行者天国のノイハウザー通り、バイエルン家の王宮であった「レジデンツ」の中庭、以上 3 ケ所に絞られる。中でも最も賑わうクリスマス市は、新市庁舎前に高さ 26 mの巨大クリスマスツリーが立つマリエン広場の市で、クリストキンドルマルクトと呼ばれる。およそ 100 軒の屋台が軒を連ね、各々の店先に並ぶクリスマスグッズは、リース（輪状の装飾品）、キャンドル、キャンドル立て、くるみ割り人形や操り人形などの木製玩具、ワイングラスなど美しい絵柄のガラス製品などで、どれもこれも綺麗で精巧で実用性があり、ミュンヘン来訪者の人気の的だ。加えて、ビールの街ミュンヘンを代表するビアホール、「ホフブロイ」が隣接し、喉を潤しミュンヘン名物のヴァイス・ヴルスト（白い太目のソーセージ）に舌鼓を打つ人々が後を絶たない。

旧王宮の「レジデンツ」の中庭に設けられたクリスマス･マーケットは、グリューワインやブルスト・バーガーなどを売る飲食屋台が連なり、地元の人たちに大人気。いわば、市民の屋外社交場と化したクリスマス市で、ミュンヘンっ子にとって、なくてはならないものだ。ノイハウザー通りのクリスマス・マーケットは、普段は大型商店が建ち並ぶ歩行者天国の大通りだが､ここにもクリスマスのオーナメントを売る屋台や飲食専門の屋台が連なり、ミュンヘンっ子に混じって大勢の観光客が集まり、深夜まで賑わう。

ドイツ最大の観光都市ミュンヘンは、初秋のオクトーバーフェスト（ビール祭り）の活況に続き、クリスマスシーズン到来とともに、再び国内外の観光客が舞い戻ってきて、クリスマスの賑わいを楽しんでいく。（以上、現地の日本の方々の 2022 年情報と筆者の 2019 年取材に基づく）

ノイハウザー通り



「レジデンツ」の中庭